

EFL 授業におけるティームティーチングアプローチ

——歌、スキット、ダンスの効果的使用と共に——

櫻井 美帆子

I. はじめに

近年、我が国では、ますます英語教育が重要視されている。現在、小学校では第5学年と第6学年において英語は必修であるが、平成27年8月に発表された文部科学省の次期学習指導要領の答申の素案では、さらに平成32年度までに小学校中学年から英語教育が導入され、高学年の英語は教科化されるという（産経ニュース.2015）。

日本政府観光局（2015）によると、訪日外国人数は平成27年8月、約181万7千人（前年同月比63.8%増）、1～8月では約1287万5千人（前年同期比49.1%増）と急増している。日本国内でも外国人と接する機会が増え、コミュニケーション手段としての英語を使用する場面が多く見られる。

また、カタカナ英語には新聞やインターネット、テレビ等を通じて毎日接している。英語の語彙力が身につけていると、カタカナ英語を理解するのも速い。このように日本国内において、英語を習得することの必要性は高まってきている。

本稿は、筆者が今年度（2015）担当する、高校1年生の「英語表現Ⅰ」の授業内におけるティームティーチング授業について、そのアプローチと考察を述べる。

II. 東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校について

東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校（以下、本校）は、その名の通り、音楽専門教育中心の日本で唯一の国立大学法人の附属高等学校である。現在（2015年9月）全校生は119人。生徒は全員厳しい入学試験を合格してきている。入学試験は、実技試験のみならず、国語、数学、英語の試験もある。入学してきた生徒は、国内各地出身の音楽家の卵たちで、多才な音楽表現技術を持っている。音楽科目以外の一般教科の授業も実施されており、英語は、高1で週5時間、高2で5時間、高3で6時間の授業がある。しかし、音楽で最高の教育を受けるという目的を主として入学した生徒が多く、一般教養科目への関心は音楽関連の教科に比べて高くはない。専攻実技の練習に毎日多くの時間を帰宅後も割くため、自宅学習の時間も限られている。ただし、先述したように日本国内においても英語は役に立つ。また、本校生徒が将来海外へ留学や演奏会等で渡航すること、外国の演奏家と接触する機会を持つこと等は大いに予想される。卒業生の約9割以上が進学を希望する東京藝術大学音楽学部へも推薦入学制度はなく、センター試験の英語の成績も考慮されるので、英語の勉強は必須である。

III. 「英語表現Ⅰ」の授業について

1. 学習者について

本稿で述べる学習者は、本校の1年生、41名（男子10名、女子31名）である。

2. 授業の種類について

本校の前期「英語表現Ⅰ」はネイティブスピーカーであるアメリカ人講師（以下 ALT Assistant Language Teacher と記す）のダイアナ・ボール石山氏と日本人講師（筆者）で担当した。授業内容は以下の3項目に分類される。

- （1）ALT と筆者が組む「ソング&ダンス English」の授業。ティームティーチング。ALT 主体。筆者はアシストする。計8回。
- （2）ALT と筆者が組む英会話練習中心の授業。ティームティーチングの授業。筆者主体。ALT はアシスト

する。計2回。

(3) 筆者のみで指導する文法中心の授業。計11回。

一般にチームティーチングにおける英語を母語とする外国人講師はALTと称され、文部科学省によると「ALTは基本的には担当教員の指導のもと、担当教員が行う授業にかかる補助をする」という定義である。今回、本稿で主に述べる上記(1)のチームティーチング授業においては、外国人講師が主体となり、日本人講師がアシストする立場で授業を進めたので、厳密にはALTではないが、本校においてNative English Teacherは、ALTという名称がつけられているので便宜上ALTと呼称する。

(2)のチームティーチングでは、「EXPRESSWAYS ① Standard Edition」(開隆堂)を使用し、主に日常英会話を中心にペアワークを多く取り入れながら練習し、会話力を上げることで単語、文法事項、表現力を身につけることを狙いとする。

(3)では、「Vision Quest (English Expression I Standard)」(啓林館)を用い、文法強化を中心に語彙、ライティング能力等も高めることを目的とする。

3. 本稿の目的について

本稿では、前述の「英語表現I」のうち、(1)ALTと筆者が組んだ「ソング&ダンス English」の授業の実践報告と共に、その後行ったアンケートを通して生徒の反応について考察する。

文部科学省の高等学校学習指導要領では、「英語表現I」の目標は「英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、事実や意見などを多様な観点から考察し、論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える能力を養う」と述べられている。話したり書いたりする言語活動を中心とした授業が求められており、コミュニケーション手段としての英語表現を学ぶのに、歌、スキット、ダンスは非常に役立つ。これらの題材を使用した英語学習は既に広く多くの授業で取り入れられ、その効果も認められている。

Lake, R. (2003) は、自身のEFL授業経験を通して、楽しい気分で言葉を繰り返したり、発音したり手を動かしたりすることは、言語習得において強い手段となることを確信している。谷川道子(2008)は東京外国語大学の語劇における、せりふを覚え、発音指導を受け、身体で覚えて稽古を重ねていく過程について、外国語の修得には、これ以上の好機はないと教育効果を高く評価している。

筆者の日本人講師としての授業内の目標は次の通りであった。

- (1) 生徒が楽しみながら英語表現、新単語等を習得するように導く
- (2) ALTのアシストとして、生徒が英語を理解できないときは手助けする
- (3) 授業を静粛に進行させ、生徒の集中力を保たせる
- (4) 教室内雰囲気明るく保ち、全員がアクティビティに参加するように配慮する
- (5) コミュニケーションの手段としての生きた英語表現、単語等を教える
- (6) アメリカの文化、歴史、習慣、考え方も適宜教え、異国の文化等に関心を持たせる
- (7) 歌、スキット、ダンス等のそれぞれの活動に適宜協力し、積極的な参加を促す

手段としての言葉の他に、その国の文化、歴史、習慣、考え方等も理解することが、言語習得をより簡単にし、個人の視野を広め、将来の可能性を広げると筆者は常々感じる。この授業でも、機会があればアメリカの文化や歴史を紹介し、生徒がアメリカにも興味を持ち、歌、スキット、ダンスを通して、文化的活動にも注目してもらいたいと考えた。

多くの生徒がこれらの題材を喜ぶだろうと推測された反面、聴解力などの差から、題材に対する個人の関心度や、授業態度が大きく異なることも予想され、授業の満足度にばらつきが出ることが考えられた。

4. ティームティーチングの授業について

野田哲雄(1992)は、外国人講師と日本人講師の事前の打ち合わせや、お互いの長所を生かし、助け合うことが効果的だと述べている。例えば、日本人講師は文法的知識に詳しく、日本人にとって難しい発音等を知っており、また外国人講師は母国の文化・習慣について精通しているので、お互いの情報交換が非常に参考になるというこ

とを挙げている。ALTと筆者はお互いの意見を尊重し「楽しく英語学習をさせる」という共通の目標のもとに、スムーズに授業を進めることができた。

5. 題材について

題材は、ALTの選択したミュージカル「*Hairspray*」を参考にしたものである。このミュージカルは1987年にオリジナルの映画が作成され、それをもとに2002年にミュージカル化、2007年に映画化もされている。1960年代のアメリカのメリーランド州ボルチモアに住むダンスが好きな女の子とその周辺環境の話であり、高校生の学習者が共感できる、若者中心の恋愛を描いた場面を含む青春映画である。まだアメリカでは黒人に対する人種差別も色濃く残る時代であることが、映画のせりふや人々の態度等からも伝わる。スキットに使用した「せりふ」は、「*Hairspray*」中の一部を使用した。登場人物はTracy（白人、物語の主人公）、Link（白人、Tracyが恋している男子）、Penny（白人、Tracyの友人）、Seaweed（黒人の級友）である。TracyがAmberという女生徒からボールをぶつけられ、倒れた後の場面である。1グループ1分半程度の非常に短いスキットである。

IV. 実際の授業と内容報告

1コマ50分間の授業を8回ティームティーチングの授業にあてた。以下、順に説明する。

○1回目～自己紹介／せりふと歌のプリント配布～

生徒には、入学後初めての「英語表現I」の授業において、英語で自己紹介をさせた。名前、出身地、現在の居住地、趣味、自分の専攻実技、好きな音楽等を発表してもらった。

ALTが質問し、それに答える形で進められ、初めは緊張していた生徒たちも徐々にリラックスしていた。英語が苦手で聞き取りが不得意な生徒の場合は、筆者が助け舟を出した。ALTの発言の全てを訳すのではなく、生徒が理解できないところや授業の流れが滞ってしまう場合に、筆者が単語の綴りを黒板に書いたり、口頭でヒントを与えたりして生徒の理解を導いた。ALTの発言の全てを日本人講師が訳すと、ALTの英語を集中して聞かなくなってしまう怖れがある。分からないところが少しあるだけなら、前後関係から意味を推測することも可能であるし、次回はもっと集中して全部理解しようというチャレンジ精神も喚起されると考えた。

○2回目～全員でせりふの練習／せりふの解説／グループ分け／歌詞の練習～

まず、せりふを全員でALTの後に続けて口頭練習し、発音と概要を掴ませた。その後、ALTがせりふを読みながら、それに関する質問を生徒に投げかけ、答えを聞きながら英語で説明していった。その時に日本人講師は、理解が難しいと思われる説明を訳したり、さらに文法説明を加えたりしながら時代背景を説明していった。ALTが全てを単に説明するのではなく、生徒に状況を想像させ、考えさせ、そこから答えを導く方法は、生徒が集中し、内容理解がより進む。その後、登場人物4人になるよう（1グループのみ2人1役）出席番号順に割り振り、10グループを作成した。宿題として自分のパートを練習してくるよう指示した。その後全員で歌の練習を行った。

スキットで使用した「せりふ」の中で難しい表現等を、下記に列挙する。

Link: Tracy? Tracy, how you doin'? Gee, you're beautiful when you're unconscious.

Tracy: Where am I? Link?

Link: You better? For a second there it looked like "Teen Angel" time.

ここでは、「how you doin'」、「Gee」、「unconscious」、「Teen Angel」等について考えてもらった。「Teen Angel」は1959年に発表された歌で、歌手は16歳で亡くなった自分の恋人のことを曲中で、「Teen Angel」と呼んでいる。この時代に流行った歌を背景にしており、文化を知ることに役立つ。

Link: You've got a funny way of putting things. I like that.

Penny: The nurse is out sick, but look what Seaweed found.

Seaweed: Band-Aids and Q-Tips!

「ve got」、「put things」、「be out sick」、「Band-Aids」、「Q-Tips」等の表現を理解するのが難しかったようだ。「Seaweed」は人名であるが、単語の元の意味や人種がどのように推測されるか等も考えさせた。

Seaweed: My mom's pitchin' a platter party at our record shop on North Avenue. Wanna come check it out?
 Penny: I, too, feel not good. May I also come check it out?
 Seaweed: You surely may.
 Tracy: I've never been to North Avenue before.
 Link: Would it be safe up there for, you know, us?
 Seaweed: Don't worry, cracker boy, it's cool.

“platter”, “pitch a party”, “wanna”, “check it out”, “you know”, “cracker boy” 等について生徒に質問した。また何故 “North Avenue” に行くことについて Link が不安に思うかも考えてもらった。

全体を通して口語表現が多いので、それに慣れるという目的では、せりふの練習は非常に役に立った。その反面で、教科書で習う正式な文法を使用した英語とは違い、せりふは省略や簡素な表現 (’ve got=have got, wanna=want to, pitchin’=pitching 等)が多い。スラングを理解できることは、コミュニケーションでは大切であるが、前提として既に文法的に正しい基本的な英語を学び、表現を理解していることが望ましい。正しい文章の省略や簡素化は簡単だが、その反対は難しい。しかし、今回の生徒は中学校で基礎的な文法事項をほぼ習得しており、省略表現を容易に推測できたので、時期的にタイミングが良かった。

生徒は若い世代に属しており、アメリカで黒人が差別されていた時代やその内容についての知識が浅い。ALT の英語による簡単な解説後、更に筆者が差別や公民権運動等について日本語で説明した (奴隷解放宣言や南北戦争終結後も実際に差別は多く残っており、黒人と白人が結婚できなかつたり、使用する場所が分けられていたりした。バスで白人のために席を譲らず逮捕された黒人がいた事実や、キング牧師が黒人の公民権運動のために立ち上がり、1963年、ワシントン D.C.で “I have a dream” で有名な演説をしたこと等)。

ティームティーチングでは、日本語で説明した方が時間の節約になる歴史等を日本人講師が行えるのが利点である。差別が色濃く残る時代背景を知らないと、何故 Link が “North Avenue” に行くことを不安に思っているのか分からない。Seaweed のみが黒人で、他の人は白人であり、Seaweed が自分の住んでいる黒人街に白人の級友を誘っており、誘われた白人は、そこに行くのは人種が違うので自分たちは危険かもしれないと心配して出たせりふである。

授業で使用した「歌」は、ミュージカル「*Hairspray*」中の「YOU CAN'T STOP THE BEAT」である。せりふで練習した前述の4人それぞれが別々に歌う箇所と全員で歌う箇所がある。

まずは、全員で ALT の後に続いて口頭練習をした。その後、ALT が難しい単語、表現を説明した。筆者は生徒の理解が足りないと思われる箇所を日本語で補足説明をした。楽譜がついており、生徒は楽譜が読めるので歌いやすかったようだ。ここで歌の冒頭の一部を紹介する。

You can't stop an avalanche as it races down the hill.
 You can try to stop the seasons, girl, but you know you never will.
 And you can try to stop my dancing feet, but I just cannot stand still.
 'Cause the world keeps spinning 'round and 'round,
 and my heart's keeping time to the speed of sound.
 I was lost till I heard the drums, then I found my way
 'cause you can't stop the beat!

ここでは、avalanche, still, keep spinning, was lost, 'cause 等多くの単語、表現を紹介できた。

○3回目～グループでせりふ練習～

グループに分かれて10分ほどせりふ練習をさせ、その後、教室前方で、グループごとに順番でせりふを読ませた。覚えてきていた生徒もいたが、大部分の生徒が、まだプリントを見ながら読んでいた。大勢の前でせりふを言う練習は、恥ずかしさを克服し、英語を話すのに慣れるという面でとても有効である。「自分のせりふを3回ずつ書いてきて提出する」という宿題を出した。

○4回目～せりふの意味の再確認／歌の練習～

せりふを ALT と生徒全員で読み、意味の確認後全員で歌の練習をした。

○5回目～グループでせりふ練習／発表／歌の練習～

グループごとに教室の前に出て発表。生徒は徐々に人前でせりふを言うのに慣れてきた。動作、演技なども少し加えられるようになってきた。

○6回目～スキット試験～

試験は、グループごとに教室前方に出て、せりふと共に演じてもらった。自分のせりふは暗記していることが前提であり、3, 4 人を除いて、ほとんどの生徒が暗記していた。滑らかに大きな声でせりふを述べていた生徒も半数ほどいた。他人の前で演じることに抵抗が大きいのか、大半は感情表現や身体表現があまり得意ではない。相手の目を見て言うことができない生徒や時々せりふの単語が抜けてしまう生徒もいた。しかし、全てのグループが他の生徒の前でスキットを最後まで演じきったのは生徒が熱心に努力した成果であると感じた。

○7回目～歌の練習／ダンスの練習～

歌を聴いて練習をさせた。ここでは、ピアノ専攻の生徒2人に教室内のグランドピアノ（各教室にグランドピアノがある）を使用し、即興で伴奏をしてもらった。流石に上手に伴奏してくれたので、生徒の歌の練習にも気合が入った。その後、CDの音楽と共に ALT が振付けたダンスの練習をした。歌いながらそれに合わせたダンスを少しずつ練習して覚えていく。最初はふざけていた生徒たちも何度も練習するうちに振付を習得し、ダンスをしながら歌うことに喜びを感じているようであった。

○8回目～歌のパート練習／大ホールで歌とダンス～

教室で歌を練習した後、校内のホールで CD に合わせて歌いながらダンスを練習した。授業の前半は、ホールにいることに興奮し、騒いでいた生徒も徐々にダンスに集中するようになった。最終的には、生徒2人の伴奏で、全ての生徒が歌いながらダンスをすることができた。非常に難しいダンスだが、振りも覚え、英語の歌を歌いながら踊っていたのには感動した。全員音感がよく、リズムにのるのがとても上手であった。昨年度担当の講師から「1回目の授業からのホール使用は、生徒がはしゃぎすぎて収拾がつかない」との忠告を受け、最終日に総仕上げとしてホールでダンスをさせたのは正解であった。パートごとに分かれて歌い、ダンスもできたので、生徒の達成感が見て取れた。

V. 授業後アンケートについて

1. 質問項目とその結果

8回の授業を行った後、この授業についての簡単なアンケートを実施した。質問は次の7項目。問1, 2, 5 は選択肢の内から1つ、問3, 4 は複数回答可とした。また、問3, 4 はコメントがある人には述べてもらい、問6, 7 は質問に意見を述べてもらった。選択肢は、時間節約のため事前に筆者が生徒の回答として予測できるものを既に記入しておいたものである。無記名であり、生徒の真の意見が聞けたのではないだろうか。

問1 ネイティブの先生が話す英語を理解できましたか。

- ・とてもできた 3
- ・できた 20
- ・どちらともいえない 10
- ・あまりできなかった 6
- ・できなかった 2

問2 「ソング&ダンス English」の授業は英語習得に役に立ちましたか。

- ・強くそう思う 7
- ・思う 22
- ・どちらともいえない 7
- ・あまり思わない 3

- ・思わない 0

問3 問2で「思う」と答えた人にききます。どういう風に役に立ったと思いますか。

- ・せりふで新しい表現や単語が覚えられた 14
- ・せりふで覚えてわかりやすかった 4
- ・ダンスと歌で歌詞が覚えやすかった 10
- ・歌で新しい表現や単語が覚えられた 12
- ・グループ活動が楽しかった 11
- ・その他
「ネイティブの先生の英語に少し慣れた」
「知っている映画、曲だったから身近に感じた」
「英語が楽しく思えて勉強したいと思ったから」
「発音、省略の言い方」

問4 日本人の先生の存在はどういう風に役に立ったと思いますか。(複数回答可)

- ・英語表現や単語の意味を教えてくれた 15
- ・時代背景について教えてくれた 2
- ・さらに深い情報をくれた 6
- ・注意してくれたので教室が静かになった 7
- ・ネイティブの先生の英語が理解できなかったときに日本人の先生が教えてくれた 29
- ・その他
「授業に笑いをくれた」
「笑い」
「ダイアナ先生の暴走を止める」
「役に立ったわけではなく、かといって役に立たなかったわけではない」

問5 授業は楽しかったですか。

- ・強くそう思う 13
- ・思う 22
- ・どちらともいえない 6
- ・あまり思わない 0
- ・思わない 0

問6 「楽しかった」のはどうしてですか。または「楽しくなかった」のはどうしてですか。

- ・歌に関して
歌が好きだから (他2名) / 洋楽が好きだから / 歌ったから (他2名) / 歌が楽しかった
- ・ダンスに関して
ダンスなどがあったから / ダンスをしながら歌ったから。ダンス大好き / ダンスが楽しかった /
ダンスはいいねえやっぱり / ダンスの振付がおもしろすぎた / このような機会を与えられないと踊ったり
しないので、いつもと違うことをやった楽しさがあった / 201のお部屋 (ホール) でダイアナ先生がダンス
を教えてくださいましたのが新鮮で面白かった
- ・ダンスと歌に関して
ダンスや歌で盛り上がったため (他1名) / 歌ったり、おどったりしたから / 歌とダンスが楽しかったから
(他1名) / 歌を歌ったり、ダンスをしたりするのが楽しかった。ダイアナ先生のノリがよかった! / 普段

にはない歌や踊りができたので楽しかった

・その他

興味深い内容だった／いろんな活動ができた／グループ活動が楽しかった／先生がおもしろかったから／楽しい雰囲気だったから／型にはまっていない感じがいい／他の授業ではない体を動かすということが楽しかった／音楽にのりながら英語を楽しめたから／みんなで楽しく盛り上がってダンスや劇をすることができたから／ストーリーが面白かったし、歌やダンスがあることで、ただ英語を読むだけにならなかったから／いつもの英語の授業とは全く違って、文法を覚える授業ではなく、雰囲気で英語を感じることができたから／普段、歌って踊ることがないので踊ったのが楽しかった。外国の文化とかに興味があるので、そのことも学べて良かった／毎週、この授業が終わると楽しくてテンションがあがりました。歌いながらだと自然と英語ができるから／もうちょっと言い回しの練習が必要だと思います。1割しか歌えてない／分かれば楽しいけど、分からない人にとってはつまらないかもしれない

問7 今後このような授業があればどのような題材を扱ってほしいですか。または授業に対して何か要望はありますか。

・題材について

ハイスクールミュージカル (他5名)！これは絶対したい！／ミュージカル (他1名)／あれやりましょーう！サウンド・オブ・ミュージック (他3名)、魔笛。／テイラー・スウィフト (他1名)／ディズニー系 (他1名)／ディズニー映画を題材にしてほしい！／洋楽、マイケルジャクソン (他3名) (Love Never Felt So Good, Man in The Mirror)／ウィキッド (他1名) CATS, オペラ座の怪人、ワンダダイレクション／アニーの曲／ビートルズ／歌うやつ／High School Musicalの「All For One」がやりたい！「We're All in This Together」もやりたい／アリアナ・グランデ etc. 最近のもやりたい！／F・R・I・E・N・D・Sというアメリカのドラマシリーズのエピソードのうちの1つをやってみたいです／ライオンキング、マンマ・ミーア、ターザン、ブロードウェイでやったものとかはかっこよくて良いと思います！／楽しくできる作品だったら何でもいいです！また歌やダンスがあったら面白そうだなと思います

・授業について

またダンス！もっと日本語訳のプリントとかがほしいです！／もう1回やりたい／じっくりセリフを練習したかった／もっとグループ活動を増やして、グループ発表スピーチみたいなのができるとよい／授業を聞きたいのにうるさい／板書が間に合わないのと0.8倍速くらいでやってくださると幸いです

2. アンケート結果に対する考察

ALTが話す英語は23人(56%)の生徒が問題なく理解できていたようである。問1において、「どちらともいえない」を選んだ生徒は、時々難しかったときもあったということであろう。「あまりできなかった」は6人、「できなかった」は2人であった。

授業が役に立ったかは、問2において「強くそう思う」「思う」が計29人と実に約71%が役に立ったと思っており、満足度が高かったことが窺われる。問1においてALTの英語理解が「あまりできなかった」、「できなかった」を選んだ計8人中、授業は「役に立った」と5人(強く思う1、思う4)が回答している。

問3の結果からは、せりふや歌、ダンスを取り入れた学習方法が英語習得に役に立ったと多くの生徒が感じていることが分かる。グループ活動も効果的に作用しているようだ。問1でALTの話す英語理解が、「どちらともいえない」を選んだある生徒は、「グループ活動が楽しかった」を選び、「英語が楽しく思えて勉強がしたいと思った」とも答えている。圧迫感の少ない級友とのグループ活動が、モチベーションをあげるのに上手く作用したと考えられる。

問4のティームティーチングにおける日本人講師は、「ALTの英語が理解できなかったときに意味を教えてください」存在として役に立ったと29人が答えている。また、英語表現や単語の意味、深い情報をくれ、教室が騒がしいときに注意してくれる存在として上手く機能したようだ。

問5においては、「授業が楽しかった」と実に35人(85%)が答えている。この中には、問1で「ALTの英語理解ができなかった」を選んだ2人の生徒も含まれ、「強く思う」「思う」をそれぞれ選んでいる。彼らは問4でも、「ネイティブの先生の英語が理解できなかったときに日本人の先生が教えてくれた」も選んでいる。つまり、「英語が理解できない→わからない→授業が楽しくない」と負の連鎖に進むのではなく、「英語が理解できない→でも日本人講師がいるから意味が理解できた→授業が楽しい」と上手くポジティブに授業に参加している。また、このうちの1人は「歌とかを歌ったから楽しかった」もう1人は「ダンスの振付がおもしろすぎた」、さらに、後者は問7においても「もう1回やりたい」とコメントしている。リスニング力が弱くても授業においていかれることなく参加し、授業への満足度も高かった様子が見られる。

授業が「楽しかった」と生徒が回答した理由として考えられるのは、スキット等のグループ活動を通して、協力しながら自然に歌詞が覚えるようになり、みんなでダンスをしながら盛り上がったからであろう。今後のこのような授業についての題材の要望も多く出て、同じような授業を心待ちにしているのがよくわかった。生徒の希望題材や授業要望も聞くことができ、今後の授業準備のためにも意味のあるアンケートであった。

VI. 結論

歌、スキット、ダンスを使用したEFL授業を通じて、生徒は楽しみながら英語学習ができた。筆者が授業前に掲げていた目標はほぼ達成された。時折、騒がしくもなった生徒も注意するとアクティビティに集中していた。ALTの英語の理解度が足りない生徒も適宜サポートすることができた。また、「楽しかった」だけで終わらず生徒の英語の力も高まった。これは、授業内のスキット試験や授業の内容理解度を確認する内容を含んだ学期末テストにおいても、ほとんど全員が素晴らしい成績を収めたことから立証できた。

筆者は、「アメリカの文化、歴史、習慣、考え方も適宜教え、異国の文化等に関心を持たせる」ことも目標の一つにしていた。これについては、「時代背景について教えてくれた」「さらに深い情報をくれた」を選んでいる生徒が計8人いたことから、一部の生徒に対しては成功したと言える。多数の生徒は歌とせりふの内容を理解するのに精一杯で、更に深い情報まで興味がいかなかったと考察される。今後、英語自体の能力が高まると自然にその文化等にも関心を持つようになるであろう。次回にどのような題材を扱ってほしいかについて、積極的に多くの意見が出たので、歌やミュージカルという文化活動に対する興味が深まったようだ。

一連の授業前に筆者は、ダンス等のアクティビティが嫌いな生徒がいる可能性もあり、モチベーションが下がるのではないかと危惧していたが、実際は投げ出す生徒は皆無で、歌、スキット、ダンスを楽しみ、英語聴解力が弱い生徒でも授業に対する満足度が高かったことがわかった。

この結果は、音楽に非常に興味を持つ集団なので、歌に対して臆することなく接し、更に即興でピアノ伴奏をしてくれる仲間のおかげで、より雰囲気はよくなったからではないだろうか。スキットのせりふを覚えることもグループ活動が功を奏し、恥ずかしさを克服して他人の前で披露できるようになった。少し英語が苦手な生徒もいるが、生徒同士で質問したり、答えたりしていた。協力して何かを作り上げるチームワークの大切さを学んだようだ。ダンスにおいても音感が優れているため、リズムにすぐに反応していた。

グループ活動では、身体能力や言語活動能力において劣る者は、劣等感を感じ、萎縮し、活動に積極的に参加せず、優れた者が劣った者を軽んずる態度を見せることがある。しかし、この授業では生徒間にそのような行動が見られなかった。お互いが素晴らしい音楽の才能を持っていることを知っており、その点で人格を既に認め合っているため、他の部分が不得意でも、相手を全否定する態度を取ることがなかったのであろう。また、ダンス能力が桁はずれに優れている生徒もいなかったため、誰かが過度に絶賛されることや自慢することもなく、穏やかにダンスの指導も進められた。

今回の授業は、チームティーチングという形で、2人の講師で丁寧に生徒のケアができ、誰も取り残されることなく、生徒全員が楽しみながら授業に参加でき、非常に有意義であった。

音楽高校の生徒の特質、つまり全員が音楽に対しては強い興味、関心があるということを手く生かすことのできた、生徒の満足感と学習効果の高い、成功した一連の授業であった。今回のアンケート結果を生かし、さらに授業の質向上に努めたい。

参考文献

- Kido, Mayumi. "Efficient Methods of Teaching Communicative English with Movies and Music." In *The Centre for the Study of English Language Teaching JOURNAL*, 3, pp. 1-16. Fukuoka: Fukuoka Jo Gakuin University, 2015
- Lake, R. "Enhancing Acquisition through Music" In *The Journal of the Imagination in Language Learning and Teaching*, 7, pp. 98-106. Edited by C. Coreil, New Jersey: New Jersey City University, 2003
- Menish, Marc. "Using Music in the University ESL Classroom: Students as Performers." 東京：青山学院大学 青山スタンダード論集 第9号、2014年、261～272頁
- Shaiman, Mark and Thomas Meehan, *Hairspray*, accessed September 23, 2015 <http://www.husd.org/cms/lib08/AZ01001450/Centricity/Domain/2856/58134708-Hairspray-Libretto.pdf>
- Shaiman, Mark and Scott Wittman, *YOU CAN'T STOP THE BEAT*. Scribd. accessed September 23, 2015 <http://ja.scribd.com/doc/161045715/Hairspray-You-Cant-Stop-the-Beat-Sheet-Music#scribd>
- 産経ニュース(2015)「小学校で英語、高校に新科目…文部省が大幅改革の答申素案公表」(2015年8月5日発表) <http://www.sankei.com/life/news/150805/lif1508050031-n1.html> (2015年9月23日現在)
- 田邊佳隆「英語授業における歌の活用に関する理論的概観とその実践」、『近畿大学語学教育部紀要』第3巻2号、2003年、83～100頁。
- 谷川道子・柳原孝敦編著『劇場を世界に—外国語劇の歴史と挑戦』東京：東京外国語大学 2008年。
東京藝術大学「東京藝術大学学生募集要項（音楽学部・別科）」、2015年、13頁。
- 日本政府観光局（JNTO）（2015）「平成27年訪日外客数・出国日本人数」（2015年9月16日発表） http://www.jnto.go.jp/jpn/news/press_releases/pdf/20150916.pdf (2015年9月23日現在)
- 野田哲雄「Team Teaching の効果的な方法」、『英語論考』23巻、1992年、100～110頁。
- 文部科学省（2010）「高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編」http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/fieldfile/2010/01/29/1282000_9.pdf (2015年9月23日現在)
- 文部科学省（2011）「文部科学省が一般的に考える外国語指導助手（ALT）とのティーム・ティーチングにおけるALTの役割」http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1304113.htm 2015年9月23日現在)